法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-08-10

<書籍紹介>湿地の博物誌

TAKADA, Masayuki / 高田, 雅之

(出版者 / Publisher)
法政大学人間環境学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
The Hosei journal of humanity and environment / 人間環境論集
(巻 / Volume)
16
(号 / Number)
1
(開始ページ / Start Page)
107
(終了ページ / End Page)
108
(発行年 / Year)
2015-11-30

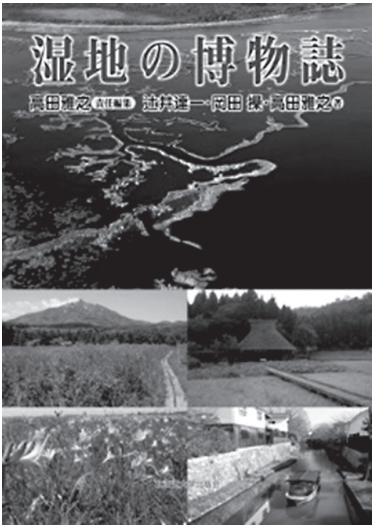
Hosei University Repository

書籍紹介（Book Review）

2014 年度に人間環境学会から助成を受けた書籍を紹介します。

湿地の博物誌

高田雅之：責任編集
辻井達一・岡田 操・高田雅之：著
2014 年 12 月刊行　北海道大学出版会



“湿地”と聞いて、ジメジメして得体の知れないところか、貴重な生物のいる近づき難いところというイメージをまず持つ人が多いのではないだろうか。しかしそのイメージとは裏腹に、実は人間との関わりが極めて深い“場”である。日本書記では豊かにアシの茂る国と、古事記ではトンボがたくさんいる国と日本のことが表現され、日本はまさに湿地の国であり、水田や漁労、水運など、我々は巧みに湿地を利用して自然と調和し、独特の文化を築いてきたのである。

本書では湿地を保全し賢明に利用することを目的とする国際条約である「ラムサール条約」における湿地の定義と同様、水田や水路など人間が関わる水辺を含み、湿地を幅広く扱っている。そうすることで、生き物や生態系に留まらず、人間との様々な関わり方が見えてくる。それを“○○学”という切り口を当てて多様な角度から湿地について語りかける内容としている。例えば、農林学、食品学、医療学、交通学、戦史学、建築学、防災学、伝承学、祭祀学、文学、美術史学という具合だ。このような切り口で 46 の小話にまとめ、どこから読んでも味わえる読み切りとした。言い換えれば湿地にまつわるネタ本と言える。

これらの小話を 4 部構成にまとめている。最初は“湿地とは”から始まる入門として「Ⅰ部 湿地をめぐる自然と地理」、次いで私たちと湿地が身近であること

Hosei University Repository

を実感してもらう「Ⅱ部 湿地をめぐる暮らしと産業」、そして少し玄人的な切り口で「Ⅲ部 湿地をめぐる歴史と社会」、最後に遊び心も加えて奔放に語った「Ⅳ部 湿地をめぐる地域と文化」という流れとした。日本国内の話に留まらず、海外の話も頻繁に登場する。

博物誌と称してこのような語り口とすることによって、湿地は近づきがたく得体の知れないものではなく、我々と縁が深く、なくてはならないものである、という認識の転換を狙っている。自然や環境は見方を変えた瞬間にその価値に気付かされることがしばしばある。そんな一冊となることを願っての出版である。

なお、本書に収められている話は、2008年から2011年の4年間計48回にわたって「北方林業」（社団法人北方林業会：札幌市）という雑誌で連載した「湿地と湿地林に関する十二章」を元に編集したものである。